

the spirit of the times

実録 国際子供演劇祭

40周年実行委員会

それは突然始まった！！

ある日、それは突然始まった。まさに、突然だった。

1991年暮れの某日、水戸青年会議所40周年記念事業準備委員会が開かれた。同委員会の当時の活動は、水戸青年会議所の40周年に行う記念事業、式典などの準備であった。なかでも、記念事業の企画は難行を極め、「全国ラーメンバトルロワイヤル」、「第1回ドッジボール世界選手権」（どこかで本当に行われたらしい）、「国際パフォーマンスフェスティバル」などの訳のわからない企画が飛び出す始末。最終的には、もっともまともそうな企画「国際大学演劇祭」が残っていた。しかし、この日の委員会で突然「国際子供演劇祭」という企画が登場した。

その時、委員会メンバーは、水戸青年会議所と地域の交流が図れ、水戸芸術館と市民との交流も図れるというこの薔薇色の企画に酔いしれた。その後の苦労などまだ考えもつかなかった頃である。

誰も気がつかなかった！！

明けて1992年、旧準備委員会メンバーに新たなメンバーを加えて、40周年記念事業特別委員会のスタート。記念事業も一見順調に船出し、劇団のメンバーも揃った。しかし、劇の練習が始まると、委員会メンバーはこの事業がいかに大変なものであるかを思い知らされることになる。仕事の合間を縫ってやれるようなものではなかったからだ。公演日が近づくに連れて、その厳しさは増す一方だった。

プロ（教師）ではなく別に本業を持つ者にとって、66名の子供たちの面倒を見るということは、想像を絶する苦労である。あるメンバーは、社長に「馘首だ」と驚かされながらも、あるメンバーはお客に不義理を続け、従業員から冷たい視線を浴びながらも稽古場へと通った。子供たちの出欠の確認、稽古の相手役、小道具の手配、etc、etc・・・。

最初の頃、「なんでこんな苦労をしなければならないのか」「大変なことを始めてしまった」と、誰もが思っていた。しかし、稽古が進み、まとまりがなくただ騒々しかっただけの子供たちがひとつのものを作り上げていく過程を見守るうちに、この子供たちの舞台を早く見てみたいという思いの方が強くなってきた。

雨よ降るな！

そして、7月31日日本番。僕たちは舞台裏で祈りながら見守っていた。

子供たちが舞台狭しと駆け回る。「あっ、台詞をトチった」「動きが揃っていない」「声が小さい」僕たちがハラハラしながら見つめているうちに初日の公演は終了した。100点満点の評価でいけば、せいぜい60点のできだった。残り2日間の舞台に期待がかかる。

8月1日公演2日目。朝から天候不順。仕事も手に付かず、曇り空を見上げている。時折小雨がパラ付く。「降るなよ」と心の中で念じるが、空はますますかげりを増し、雨風は強くなった。

夕刻、会場に入った頃には断続的に小雨が降り始めていた。会場の設営をするスタッフの顔が曇る。リハーサル室で出番を待つ子供たちの表情も暗い。自然に輪ができ祈り始めた。しかし、祈りも空しく、19時中止が決定。

演出の大貫君から中止の決定が発表されると、外の雷に呼応するかのようにリハーサル室にはブーイングの嵐が起こった。土砂降りの雨の中、子供たちは家路につき、スタッフは無念の酒を求めて繁華街の暗闇に消えた。

子供たちへ、感動をありがとう！！

8月2日。8月とは思えぬ肌寒さ、いまにも雨が降りそうな空模様の中、千秋楽の公演は幕を開けた。1,400名の観衆の見守るなか、子供たちがつむじ風を巻き上げながら駆け抜ける。表情が明るい、彼らの演じる楽しみが伝わってくる。もし、いま雨が降っても彼らの熱情の火を消すことはできない。天もそれを察したのか、空はそれ以上崩れることはなかった。

そして、感動のフィナーレ。笑顔、泣き顔、放心した顔、さまざまの顔が舞台に並んだ。終わった。1日雨で公演が中止になったことが、結果的に子供たちの演技力を高め、最高の舞台を造り上げた。リハーサル室に戻った後も、子供たちの興奮は覚めず涙が床を濡らした。もちろん、僕たちの目頭にも熱いものが・・・。

「さようなら」「また会おう」「今度遊びにきてね」さまざまな言葉をかけ合いながら、子供たちは拍手で迎える両親たちの待つ扉の向こうへと次々に姿を消した。僕たちは、その後ろ姿に「ありがとう」と小さく呟いた。